

山崎郷土叢

NO. 139

令和4.8.27

山崎郷土研究会
兵庫県宍粟市山崎町

大谷 司郎

安田青風と山崎 (二)

はじめに

前号の会報では、青風が大正十四年(一九二五)に龍野中学校から山崎高等女学校へ転任して来たことと、山崎の地で短歌を広めた経緯を青風の事跡一覧と合わせて記した。今号では山崎高女を始め、当地での短歌の普及の留まらず、広範な文化活動に力を注いでいる。なかでも、当郷土研究会の前身である宍粟郷土研究会にも深く関わりを持っているので紹介することとする。

山崎新聞の寄稿文「随感随想」

前号に続き山崎新聞の寄稿文でもう一つ当時の世相について「随感随想」と題した昭和六年(一九三一)一月一日発行の第七八九号を紹介する。(抜粋)

「私は近頃世の中がだんだん軽薄なやうになってゆくやうでさみしくてならない。人情といふやうなものが次第に心の隅っこの方へ追いやられてしまつて、何かかうひからびた人間がうようよし

大谷 司郎

目次

安田青風と山崎(二)	大谷 司郎	1
ぶらりふるさと地名考「葛沢」	竹内 克司	7
与位・田井間の山越えの道	清水 哲	11
闇斎先生の祖父と父、 そして主家木下家について	高井 淳	13
上比地岩田神社と 『播磨国風土記』比治里再考察	片山 昭悟	15
史跡案内石柱の補修		21
会員・家族の文芸		22
事務局だより・編集後記		23

て骸骨の乱舞をやつてゐるやうに見えるのである。人情におぼれることはむろんよくないけれども、人情の分からない人間は本当の人間ではない。日本の文学、殊に平安朝の国文学などは、じつによく人情にぬれてゐる。そこにわが国民性の極度の美しさが發揮されてゐる。

近時、舶載の個人主義思想は澎湃として吾が国の上下に襲来浸水して、幾多の日本個有の思想感情を押流さうとしてゐる。教育でも政治でも、昔のものには人情があつた。今は人情の代りに理屈のさばつてゐる。これが西洋化である。皮相なる個人主義化である。

私達の眼は仰いで天を見てゐる。だがその足は永久に大地を離れることが出来ない。そこに人間のあはれがある。このあはれを全的に認識すると、そこに人情が生まれるのである。この人情が

安田春風の事跡(4)

西暦年	和歴	年	月	日	事項	年齢	出典
1967	昭和	42	8	10	歌集『街空』を改訂再版発行する。	71	歌集『街空』
1968	昭和	43			短歌の創作と指導に尽くした功績で勲五等双光旭日章を受ける。	72	安田青風の人と作品
1970	昭和	45	4	15	「山崎三景さいこの節」を寄稿する。	74	宍粟郷土会報No.36
1970	昭和	45	11	13	『安田青風短歌鑑賞』を編者八谷正、発行者石黒清介が発行する(短歌新聞社)。		安田青風短歌鑑賞
1970	昭和	45	11	15	八谷正が『安田青風の人と作品』を著す。		安田青風の人と作品
1976	昭和	51	10	20	安田青風著歌集『立岡山』を発行する(創元社)。昭和39年から45年までの作品集。	80	歌集『立岡山』
1976	昭和	51	11	5	『安井俊二歌集』が発行され、序文を記す。	87	安井俊二歌集
1983	昭和	58	2	19	安田青風死去する。		
1989	平成	元	4		城原中学校から山崎南中学校と校名変更したが、校歌は引き継いだ。		宍粟市教育委員会

* 上記年表は前号の続き

宍粟郷土研究会々報『しゝさは』へ安田青風の寄稿分抜粋

号数	発行年月日	題名	主な内容	備考
第1輯	S8.8.15	宍粟雑考	播磨国風土記や日本書紀、垂仁紀等から宍粟の地名の由来を記述	
		編輯後記	巻頭言に松下敏氏の寄稿を戴いたこと。会報編輯を引き受けたことなど。	
第2輯	S9.2.20	桓武伊和行	永井瓢斎のお供をして葛沢村へ行く。13首短歌	
		編輯後記	郷土展覧会を予定していることなど。	
第3輯	S9.7.15	巻頭言	郷土を愛する心は殆ど本能的なもので理屈では説明がつかない。そのうえで郷土研究を進めよう。	
		本会記事	8年1月11日宍粟郷土研究会設立準備会を実施。葛沢村古墳発掘の松下敏氏の講演会など記載。	
		編輯後記	身边が俄に多忙になったこと	
第4輯	S9.12.15	揖保川	詩(巻頭言のページ)	
		編輯後記	各寄稿の紹介など	
第5輯	S10.7.1	巻頭言	太平記の中の正成、正季兄弟の記述引用	
		編輯後記	日露戦争30周年記念大楠公600年祭等、国家意識強調の時代。	
第6輯	S11.7.1	郷土の概念	出生地、成長地、居住地いずれも郷土であり、それに主観的な郷土意識を加えて区分して解釈するのがよいか。	
		編輯後記	郷土を愛する心なくして、何の産業更生ぞや。郷土資料館の新設が必要欠くべからざるものである。この編輯は安井俊二君の手を煩わした。	
第7輯	S12.6.5	編輯後記	本輯はすっかり安井俊二君の努力によってできた。	

本になって日本人は発展して来た。私は人情の中に、人間の両極を生かしてゆく生活が望ましい。獣でありながら、その獣である事を歎いて神に到らうとする清きの魂の保持者としての我れを自覚し神にまで自己の魂を上げ得た聖者を尊敬すると同時に、つひにその中道にし挫折した無力者にも、一掬の涙をそそぎ得る人間―さういふ人々によって人間が建立しうべき最大最美の世界を実現したいものだと思ふ。」

青風はこのような深遠な思いと気概を持って短歌の道を広め、深めようとしていたと思われる。

『最上』と『くさのみ』の発行

大正十二年（一九二二）四月、山崎実業学校は男子部を廃止して新たに兵庫県立山崎高等女学校と改称された。『最上』は山崎高女の機関誌として同年七月十五日に同校校友会が創刊号を発行した。この創刊号から第十七号（昭和十六年（一九四一）八月三十日発行）までが、今も山崎高等学校校長室に保管されている。内容は学校日誌抄、卒業生の集合写真、校報、散文、韻文、短歌、俳句などで、一〇〇頁を越えるものも多い。寄稿者は高女生、教員、同窓生などで、青風が編集・発行を担当したのは、着任した大正十四年（一九二五）の第三号（十月一日発行）からの昭和十一年（一九三六）三月二十日発行の第十二号までで、校内で結成された短歌の会「草の実会」も「草の実詠草抄」として多く掲載されている。

また、「草の実会」が発足して四年を経た昭和四年（一九二九）九月一日に発行された『くさのみ』創刊号から昭和十年（一九三五）

七月十日発行の第十三号までも同じく校長室に保管されている。第四号と第九号が欠けているが、一冊に綴じられた状態で、表紙には私の見覚えのある字で安井俊二氏が「くさのみ」と記している。各号は二〇頁前後の小冊子ではあるが、この一一冊には高女生の純真な洞察力や感性が満ち溢れている。なお、この各冊子は山崎高等学校長の許可を得て複写をし、六粟市歴史資料館に保管されている。



兵庫県立山崎高等女学校『最上』第3号表紙

草の実会第一〜第三詠草集の発行

山崎高等女学校に保管されている前述の『くさのみ』とは別に、『くさのみ（草の実会第一詠草集）』を山崎高女校友会文学部が昭和二年（一九二七）十二月に発行している。この歌集は横井時成氏が所蔵されていて、タイミング良く拝見することができた。奥村奥右衛門校長はじめ同校教員や生徒たち合わせて四五人が出詠した歌が七十二頁に亘って青風により編集されている。

同じく第二詠草集は昭和四年（一九二九）三月に発行されている。

この歌集は故稲村幸子氏のご子息から市へ寄贈を受けた中に入っている。同校校友会文学部が発行し、三七人の歌が編まれている。また、同第三詠草集は姫路文学館に所蔵されていて、昭和八年（一九三三）三月に草の実会の発行として教員、同窓生、生徒合わせて一〇〇人の短歌が六四頁に収められている。なお、第四集以降は今のところ見当たらない。

野口雨情との交流

青風の初老を記念して夫人の安田サワノが昭和十一年（一九三六）五月に発行した『菖蒲湯』に歌歴を中心とした青風略年表がある。大正十一年（一九二二）の項に「野口雨情、藤井清水、権藤圓立、二階堂隆正氏等とこの頃知り合った。」とあり、雨情との交流がこの頃に始まっていると思われる。

さて、山崎文化協会が毎年発行している機関誌『やまさき文化』



『菖蒲湯』表紙

第二一号（平成十四年二月発行）に「流す筏はさきまかせー雨情と山崎ー」と題して、山崎文学会の浅田耕三氏が山崎小唄ができた昭和七年（一九三二）八月前後の雨情と青風の手紙のやりとりなど二人の親交の深さを記している。山崎小唄の作詞を野口雨情に依頼するための橋渡し役を青風が務めたことがよくわかる。

本稿では、その翌八年八月青風が発行した『旅百首』の中で、雨情との交流の一節があるので紹介する。この歌集は同年五月二十八日から六月三日の七日間にわたる山崎高女の修学旅行に引率した青風が旅の先々で詠んだ歌が収められている。（以下抜粋）

「上野駅にて、野口雨情氏、石丸悟平夫妻等の

出迎へを受く。三十一日午後五時なり

生徒らのあとよりゆきて思ひきや悟平先生に呼びとめられぬ

旅館宇仁館前にて撮影す

雨情・悟平先生らとともに写真とれどさわがしきかもよ鄙少女

（ひなおとめ）ども」

この修学旅行たるや五月二十八日午前零時に学校を出発し、奈良↓伊勢↓名古屋↓清水↓日光↓東京↓田浦↓鎌倉↓江ノ島↓石山を巡る六泊七日の強行スケジュールである。上野駅にわざわざ雨情と石丸悟平先生夫妻が出迎えに来るといふほど親交の深い間柄であったものと思われる。石丸悟平は宗教思想家で、青風は大正五年（一九一六）に氏を知り、雑誌『団欒』に執筆している。雨情が作詞した「山崎小唄」ができた一年後の再開であろうか。雨情や悟平先生を間近に見た生徒たちの騒ぎようが歌からも読み取れる。

山崎の景物を歌集に詠む

昭和八年（一九三三）十一月三十日に山崎歌話会が『山崎景物歌集』を発行している。山崎で十箇所を挙げて、一九人の会員がそれぞれの情景を歌に詠んでいる。当時の十景に興味を引かれるので紹介する。

- ①最上山 ②藤の宮 ③宍粟橋 ④深淵 ⑤荒神坂 ⑥虫狩
⑦盆踊り ⑧十二ン波 ⑨松茸狩 ⑩郡是製糸

まず、①最上山では日に三度鐘の音が聞こえる風情と街を見渡せる景色の良さを上げている。なお、最上山に鐘撞き堂が建ち、時の鐘が鳴り始めたのは大正十二年（一九二三）からで、この当時には定着していたことが分かる。②藤の宮は千年藤の大歳神社で、薄紫の藤の花房が芳しい香りを添えて風に揺れるさまは今も昔も変わらないようだ。③宍粟橋は当時は木橋で随分傷んでいたようだが、山崎町内の唯一の東の出入口として、欠かせぬ橋であった。なお、宍粟橋については、宍粟市「学びあい、支えあい」地域活性化推進事業実行委員会が、平成二十年（二〇〇八）三月に発行した『追憶ふるさと宍粟写真集』に、明治三十七年（一九〇四）と昭和九年（一九三四）の二回橋の改修があったことを写真説明に挙げて、昭和九年の同橋竣工記念の写真を掲載している。当歌集が発行された翌年にコンクリート橋が架設されたことがわかる。④深淵は宍粟橋の北で、現在は河川改修により大きく様変わりしたが、浜御殿の少し上流にあったと地元の人から聞いた。⑤荒神坂は元山崎にあり、今も桜の古木が残っていて往時の桜の名所であったことが偲ばれる。⑥螢狩りは作詠歌を見る限り、宍粟橋の上下流付近に螢が乱舞してい

ただろうと思われる。⑦盆踊りは夏の風物詩。しゃんとこ踊りにさうだる踊り、軽快な太鼓の音と音頭取り、囃しも揃ってその賑やかさが想像できる。⑧十二ン波は今も変わらず河瀬を水音立てて流れ下る水流は清しい。⑨松茸狩りは、今では想像もできないくらい大量に収穫できていて、特に河東や城下地区では多く産出していたようで、焼き茸などの松茸料理を堪能していたことだろう。⑩郡是製糸工場は山崎町中広瀬（現夢公園一帯）で大正七年（一九一八）から操業を始め、郡内の若い女性たちが工員として寮生活をしながら働いていた。この当時は最盛期で七〇〇人を超す女工たちが寝食を共に生糸を生産していた。短歌の妙味に疎い私は、九〇年前の山崎の十景が今と比較できると思い、題材を中心に取り上げてみた。

青風は巻末記に山崎歌話会が昭和七年（一九三二）七月から例会で作詠してきた山崎景物歌を一つにまとめたのが本集であると、この『山崎景物歌集』ができた経過と、昭和初期の時代背景の中で歌俳諧の大切さを述べている。（以下抜粋）

山崎の景物は、むろん本集に掲げただけで尽きてゐるのではない。けれども大凡代表的なものは網羅したやうであり、それに景物の選定に一定の標準があったわけでもなく、且つ次々と捉へてゆく日には際限もないことであるから、ここいらで一先づ切目をつけて置くのがよからうと言ふことになつたのである。・・・これは謂はば私たちが自らの郷土に贈る愛らしい一把の花束なのだから。・・・

時はまさに非常時である。歌俳諧を学ぶが如きは太平逸民の遊

楽に過ぎぬと言ふものがある。けれども歌俳諧を単なる風流韻事と心得た時代の事は知らず、今日に於少くとも歌は生活の表現である。心法鍛錬の一つの座である。寧ろ非常時なればこそ益々この伝統精神によって日本意識を高潮しなければならぬのではないか。吾等を太平の逸民と誤るなかれ。吾等こそは三千年來の伝統民族の感情に泳ぐ真の日本人なのである。



安田青風の家族写真（『菖蒲湯』より）右端が青風

『しゅさは』の編集に当たる

我が山崎郷土研究会の前身である宍粟郷土研究会は昭和八年（一九三三）に発足した。会長に前野修二（当時の山崎町長）副会長に安原源十郎、九人の幹事を置く役員構成となっていた。安田青風は幹事の一人として同年八月十五日に発行された会報『しゅさは』第一輯冒頭原稿に「宍粟雑考」と題し、宍粟の地名の起源を『播磨国風土記』や『垂仁紀』を引用しながら解説している。また、彙報（いほう）の頁では、「桓武伊和神社に就て」の小見出しで、前年来から葛沢村が要請した同神社の裏山（宮山）の古墳の調査を受けて、当会の顧問であった松下敏氏や考古学会の泰斗和田千吉博士を招聘

して実施した報告が記されている。私の地元の事でもありつつ興味を引かれる。

会報『しゅさは』は第七輯（昭和十二年（一九三七）六月発行）まで続き、編輯後記を青風が各輯とも記述している。

第二輯では「桓武伊和行」と題し、葛沢谷の奥まで入り、一三首を詠んでいる。第三輯では巻頭言に「郷土を本能的に愛するのではなく、はつきりとした自覚を以て愛したい。そのために郷土研究の旅に出よう」と郷土史研究を呼びかけている。第四輯では巻頭に「揖保川」の詩を掲載している。第五輯では巻頭言に楠木正成・正季兄弟の「七生報国」について志の差などを記している。第六輯では「郷土の概念」と題して郷土について考察を加えている。また、編輯後記で郷土博物館の新設の必要性を力説している。第七輯の編輯後記では、第五輯から以降の編輯について、青風が他の雑務に追われているため安井俊二氏に任せるようになったことを感謝を込めて記している。第七輯が発行されてまもなく、青風は山崎を後にして豊中へ移住している。

結びにかえて

以上、山崎在住の十二年間、高女の教員の傍ら、地域の短歌の普及のみならず、文化活動、執筆活動などを精力的に行った多才な人物であった。この稿を書くにあたり、安田青風が山崎に残した業績の大きさをかみしめるばかりである。

ぶらりふるさと地名考「鳶沢」

竹内 克司

「鳶沢」の地名由来

鳶沢地区は揖保川中流域の山崎町庄能から北西に延びる伊沢川いそがわの流域の集落である。生谷から始まり、下町に入ると山の端に権現さんとも呼ばれる巖石神社を通る。次は宇野に至る。宇野は長水城跡の大手にあり、宇野構遺跡地に鳶沢小学校がある。宇野より左の川向うが下牧谷で諸守神社がある。そして片山をぬけ、上牧谷に至る。これより右の谷を進めば大谷がある。次に東下野、中野へと進む。中野には廃校になった都多小学校がある。上ノ下から左に進み



鳶沢地区図

白口峠越えに小茅野の集落がある。いよいよ上ノ上の最上部、伊沢川源流域近くに岩上神社がある。

この鳶沢という地名は、明治二年（一八八九）に生谷、下町、宇野、片山、上牧谷、下牧谷、大谷、東下野、中野、上ノ、小茅野の十一カ村が合併して名付けたのが始まりで、都多谷と伊沢谷の「つた」と「さわ」を取り、「鳶沢村」と命名された。そして、村役場が上牧谷に置かれ、昭和三〇年（一九五五）まで、続いたのである。

このほど伊水小学校と都多小学校が廃校となり、今年（令和四年）四月、伊水小学校の場所に鳶沢小学校が新設された。伊水小は明治六年（一八七三）に開校し、これまでに約四千人が卒業。都多小は同二〇年（一九八七）年に設立され、約三、五〇〇人も多くの児童が巣立っている。

地区に二つ古社「岩上神社」、「大倭物代主神社」が生まれた背景

鳶沢地区には、上ノ上の岩上神社と下牧谷の大倭物代主神社（通称諸守神社）の古社が鎮座する。この地域は高家里たかやのさとといって、播磨国風土記（奈良時代初期編纂）に記された赤粟郡の七つの里の一つであった。その高家の里のほとんどが万里小路領であったが、伊沢川上流域都多谷の都多村（後の上ノ村、中野村・下野村）だけが、山科家領であった。そのため、二つの領主の荘園領内に村の鎮守として建立された神社で、その村々の氏子により守られてきたという。

「高家の里」とは 記録にのみ残る里名・郷名

風土記に記された「高家の里」には都太川と塩の村の二つの地名

があげられている。都太川は伊沢川のことである。塩の村は、牛馬が好む鹽を湧出する地で、庄能村（現在の庄能北及び庄能南自治会）が遺称地とされる。庄能は揖保川と伊沢川の合流点付近で伊沢川全流域の広がりをもつエリアを高家の里といった。ついで、平安時代に編纂された『倭名類聚抄』にも宍粟郡八郷の一つとして高家郷があり、高山寺本には『多以恵』と訓じている。里から郷に、そして読みも変化しながら、播磨国風土記の高家の里が継承されてきた。江戸時代の『播州完粟郡誌』（片岡醇徳著）に高家郷としての記述がある。



岩上神社



大倭物代主神社

一 高家郷 高家村 今は庄能村と云う。
 今宿村 枝出石 上寺 生谷村 中町村 横須村 上町村 片山
 下町村 枝長泉寺 大谷村又竹の内村とも云ふ 下牧谷村
 此の十二ヶ村生神同。右の内、高家今宿上寺の他は続に伊沢谷と云。
 下野村 中野村 上野村
 此三ヶ村を都多村と云ふ。生神同。

小茅野村

村数都而拾六村

とあり、郷の構成の村々をあげている。庄能村については、「正保郷帳」に高家村、「元禄郷帳」に「古くは高家村と申し候」と肩書され、江戸時代初期の呼び名を記している。天正八年（一五八〇）長水城の落城後のすぐさま、羽柴秀吉が田恵村に禁制を掲げている。これにより、高家の里・郷を継承する田恵村があったことは確かである。なお、いまでも諸守神社の氏子が山崎地区の庄能、今宿、上寺、横須にあるのは、同じ高家の里・郷に属していたことによるからである。

都多村の年貢にみる特産物

荘園は鎌倉期には貴族や大寺院への寄進による集中化がみられ、宍粟郡も荘園が増加している。室町時代に入ると武士による荘園侵略が進行していった。高家庄領主の内大臣万里小路時房の日記『建内記』、そして公家山科家領の都多村の記録『山科家礼記』・山科家当主の日記の『言国卿記』、『言継卿記』が残されている。特に、都多村は、高家の里にあったが、万里小路領に含まれない別個のも

ので、戦国末期まで山科家の荘園として残っていた。このようなケースは全国的には稀であった。山科家領は播磨では都多村以外に揖保荘（たつの市）、隣国の備前居都庄（岡山市）があった。山科家は天皇の服飾を司る職務を担い、その技術や有識の知識を保持し、同時に足利將軍にも重用され支援を得ていた。これらの荘園の存続は天皇家との繋がりと將軍家との結びつきによる權威のためか、さしもの宇野氏は領地そのものの横領（収奪）はできずに、預所代官として領内の年貢の取り立てと領主への納入を続けていた。

山科家は、納入が怠れば代官宇野氏に対して年貢の督促のため命令や使用人を下向させ折衝させた。年貢の内容については金銭、鹿・狸皮、綿、杉原紙、漆等などが送られている。これらはいずれも都多村の特産物で、公家の山科家には重宝されていたのだろう。特に杉原紙は上質であった。都多の年貢の金銭として千疋と表記が連続的にあり、中世では銭一貫文が百疋で十万円以上の価値があるとされ、千疋は百万円以上になる。

記録に残る代官宇野氏のこと

永享十一年（一四三九）の『建内記』に「高家庄段銭事、今日以便宣仰遣預所宇野、昨年先延引、今年必催之由、加下知了。此事雖背本意、依計会相点者也、今日六条宰相中将、有定、相語云、柏野庄続目任料、三千疋領状云々」これは、万里小路時房が未進の高家庄段銭（寺社の造営などに必要な臨時税）を代官宇野次郎満貴（守護代）に催促したものである。柏野庄とは高家庄の南に位置した菅野川流域の荘園で、広瀬宇野氏が代官職を勤めていた。

嘉吉の乱で赤松氏滅亡後の嘉吉三年（一四四三）の『建内記』に「高家庄代官宇野次郎満貴送状云、此庄半分年貢者、満貴可致沙汰、於今半分者、守護山名惣領金吾半分令押妨…」宇野氏からの万里小路時房への書状には、高家庄の年貢の半分は掌握したものの、残り半分は新守護山名持豊（宗全）が横妨しているため、これを掌握していないことを報告している。

嘉吉の乱（一四四一）とは播磨国守護職である赤松満祐がときの將軍足利義教を殺害した事件で、山名宗全（持豊）を総大将とする幕府軍によって赤松満祐以下残党は討ち果たされた。赤松氏被官の国人衆も討ち果たされたと伝わるが、実際は、播磨の在地の国人衆、宇野氏をはじめ、安積保の安積氏や揖保庄の島津氏、神岡の喜多野氏、姫路の広峰氏など多くは生き抜いている。この乱で赤松氏とともに一掃されたのではなかった。新領主山名氏の播磨支配には、自らの被官人だけで支配する余裕もなく、在地の国人衆の手を借りるのが得策であったのである。宇野氏は赤松氏の被官として佐用町から宍粟郡に移り土着した国人で郡内の柏野庄、高家庄、石作庄が權益地であった。嘉吉の乱後も、山名方の代官と共に一翼を担っていた。とはいえ、山名氏に降参した国人衆は、利権は半減し一族の困窮は免れなかったであろう。

この後応仁の乱（一四六七）以後一世紀余り続く戦国時代に突入する。赤松氏は応仁の乱に乗じて播磨から山名氏を駆逐することに成功し播磨の奪還を果たしたのである。

天文十五年（一五四六）都多村代官宇野上野守は長男右京亮・次男・女房・娘を連れて伊勢参りをし、途上に上洛し山科言継邸に赴

き、礼として太刀を持参した。翌日には言継の手配で御所の御庭を見物した『言継卿記』。言継は上野守宛てに年貢の礼状に添えて、勅筆の詩歌一葉を遣わしている。両者はよい関係を築いていたようだ。ちなみに天文六年（一五三七）宇野村直が播州完栗郡柏野庄の八幡宮（現山崎八幡神社）に三十六歌仙額を奉納している。村直は当主宇野村頼と同じく、惣領家赤松義村から「村」の偏諱へんごを拝したと思われる人物で寺奉行であった。当時の公家の文化を享受しているからこそその行為であったと思われる。

荘園の記録がもたらしたもの

幸い蔦沢地区は、荘園領主の記録により年貢や代官宇野氏の動きが記されている。年貢に金銭や割符さいふ（為替の元）が利用されるなど

西播磨の奥深い山間部の山村にまでも貨幣経済が進み、宇野一族が国文化を享受していたことも知ることができた。これらの記録は、従来軍記物に彩られた宇野氏の虚像から実像に迫る手がかりを与えてくれる貴重な史料の一つである。永禄十二年（一五六九）山科言継が都多村等の家領を確保するために織田信長に援助を受けようと岐阜へ赴いたことの記述を最後に日記は途絶えた。この後豊臣秀吉の世になり太閤検地によって荘園は消滅したのである。

参考図書 『角川日本地名大辞典 兵庫県』、『播磨国完栗郡広瀬宇野氏の史料と研究』、『播磨の光芒 古代中世史論集1』

蔦沢地区自治会の地名由来等

地名読み 地名由来、村名の変遷等

自治会名

生谷 いぎだに

生谷の生を「いぎ」と発音するのは事の始まりを意味し、蔦沢谷の始まる地からとされる。同義で一宮町三方谷の入口にあたる生栖がある。

下町 しもまち

宇野が上町、中町と呼ばれたとき、そのしもにあった下町が今に名をとどめる。

宇野 うの

江戸期上町村。長水城の大手にあたり、町場化されて上町（かんまち）、中町と呼ばれた。明治になり城主宇野氏に因み宇野と名付けられた。

大谷 おおたに

江戸期大谷村、竹ノ内村ともいった。

片山 かたやま

元下牧谷村。江戸初期下牧谷村より分村した。

上牧谷 かみまきだに

江戸期上牧谷村。伊沢谷の牧場で、牛馬が飼育されていたか

下牧谷 しもまきだに

江戸期下牧谷村。伊沢谷の牧場で、牛馬が飼育されていたか。

東下野 ひがししもの

中世都多村のうち。江戸期下野村。明治8年宍粟郡内に下野村が2つあり、区別するために東下野と改称した。（もう一方は 佐用町三河の南にある西下野。）

中野 なかの

中世都多村のうち。江戸期中野村

上ノ かみの

（上ノ上）かみのかみ

（上ノ下）かみのしも

中世都多村のうち。江戸期上ノ（上野）村。村役人の庄屋、町年寄が上ノ上と上ノ下に分けて置かれていた。

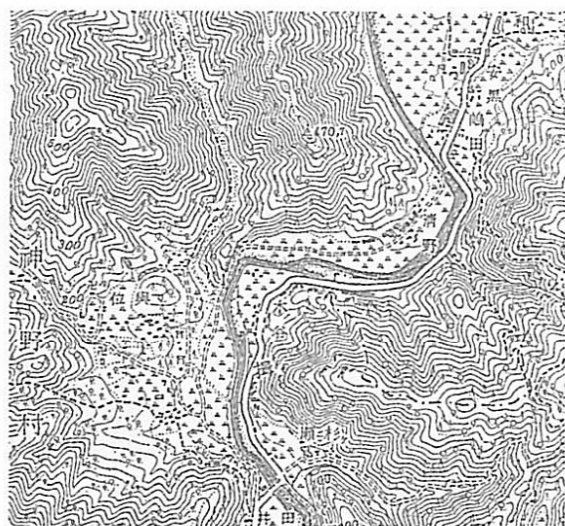
小茅野 こがいの

中世都多村に含まれていたか。江戸期小茅野村。千種川支流志文川の上流にあるが、行政区は蔦沢に属す。

与位・田井間の山越えの道

清水 哲

一 会報一三六号（令和2年）で、およそ次の様なことを書いた。
与位・田井間に険しい崖があり、明治に洞門が掘られる前は、岩に穴を穿ち栈道を作り人馬が通っていた。しかし洪水で流失することもあり、いざという時は山越えの道を使ったはずとして、明治三十年測量の地図に山越えの道が破線で示されていると引用した。もう



写真① 明治30年測量の地図

一回写真①として引用させていただく。

このたび七月三日に「よいの里ウォーク」（奥播磨夢倶楽部）があると知り参加した。二人の地元の方が丁寧に説明してくださいました。その一人昭和二三年生まれの方は、

「与位集落は、うしろは山、前は川に囲まれ安全、水も田畑もある所だが、外に通ずる道に困っていた」と言われた。小学生の時洪水で与位の洞門を通れず、山越えの道を歩いて学校に行った経験を話してくれた。

二 写真②は、与位側から南をみたもので、海拔二五〇メートル近



写真② 与位側から田井方面を見る

い山の向こうは田井集落、中央やや左に「よいのトンネル」の入口が見える。与位の洞門は写真の左端にある。山越えの道は山の高さ三分の一くらいの所を通り、写真右端の小屋付近に降りてきたらしい。田井側の降り口は「よいのトンネル」入り口の少し南にあったようだ。

今は踏み跡もわからないその道を体験した人に出会い話を聞くことが出来たことに一番感動した。高齢の方の誰かは体験しているはずだが、それがどの人かはわからない。一軒ずつ聞いてまわることもできない。半ば諦めていたが、

関心を持ち続けていればいつか知る機会があるのだと思った。
三 次頁の写真③は昭和二三年（一九四七）十一月三日撮影の米軍による空中写真である。国土地理院の空中写真閲覧サービスから引用したもので、井ヶ瀬橋は今と同じ所に移っているが、国道（当時は二十号線）は杉ヶ瀬の川沿いを通る。田井集落では国道は山沿いの旧道から離れ直線的な新しい道ができています。



写真④

右の空中写真の田井北部を拡大。
山を斜めに登る道がかすかに見える。
これが与位に越える道だと思う。
当時はどこでも人々が山に入り柴刈り
をして燃料を得ており、現在のように
木が生い茂ってはならず山道も確認し
やすい。



写真③ 1947年(昭和22)11月3日撮影
USA-R524-2-108 高度2438メートル

四 地元の方からは、昔の井ヶ瀬橋の杭の残りが水面から少し突き出ているとの説明を受けた。言われてみればそのとおり、今まで気が付かなかった。

去年のことだが、昭和三八年に、清野島田間の旧清姫橋が流失したあと橋脚の基礎部分が残っているのを地元の方に教えてもらい、初めて気がついたのを思い出した。

五 与位の洞門が明治時代に来る前、崖の岩に沢山の穴を穿ち腕木を差し込み、その上に樋(トイ)で用水を流し且つ人馬も通行出来るようにした(棧道)ことは有名である。

郷土会報六六・六七・六八号(昭和六〇〇一一年・一九八五〇八年)の「近世宍粟郡の耕地造成(田井村の畠田の場合)」という論考によれば、用水確保に苦しむ田井村が揖保川上流に井堰を設けて用水を得るため棧道を作することを計画し、それが備前の石工により着工されたのは天保十二年(一八四一)であり、おそくとも嘉永元年(一八四八)には完成したと思われる。

以前会報一三七号において、片岡醇徳の『宍粟郡誌』(宝永五・一七〇八)に、生栖・嵯峨山間の岩場に棧道が設けられたことが書かれていると紹介した。与位・田井間の棧道建設は天保年間が最初とすれば片岡醇徳が亡くなってから百数十年後のことになる。

与位集落を歩いてみると予想以上に広く感じた。山からの土砂が堆積して出来た扇状地の端を、大きな川が削り取った段差が残り、緩やかな段丘を形成している。それは五十波、段、金谷の集落によく似ていると思った。

闇齋先生の祖父と父、 そして主家木下家について

高井 淳

山崎闇齋神社には「山崎闇齋先生祖考之碑」①があります。祖考とは祖父のことです。神社門前南にある青銅製の「闇齋先生座像」の横にケースと説明文が設置されています。その説明文の改訂が令和四年三月、山崎闇齋奉賛会・西鹿沢自治会・山崎闇齋研究会の手でなされました。説明文には、山崎闇齋先生（一六一八〜八二）は自筆の『山崎家譜』②に「祖父は生于播州栗郡山崎村」と記していますとあり、『山崎家譜』は闇齋先生と山崎の縁を示す貴重な資料と言えます。山崎の地に生まれた闇齋先生の祖父はその時代背景の中で、どのような行動をしどのような人と関りを持ち、それが闇齋先生に繋がっていくのでしょうか。

当時の天正五年（一五七七）、羽柴秀吉は織田信長に中国平定を命じられます。播磨攻めの同五年、黒田官兵衛が秀吉に献上した姫路城の城代を羽柴秀長がしていました。秀吉は四年にわたり上月、竜野、三木、山崎と播磨を転戦します。当時の山崎は宇野氏が治めていました。播磨全体は同じ赤松系の城主が多く統治していました。しかし播磨地方の国々は信長の勢いには勝てませんでした。天正八年（一五八〇）五月に秀吉は篠の丸城、長水城を攻め、山崎の宇野氏は滅びました。同十年に本能寺の変で信長が討たれてから、秀吉は山崎の合戦、賤ヶ岳の戦い、小牧・長久手と連戦し、紀伊、四国

平定、そして、九州平定後は小田原攻めです。文禄の役、慶長の役の慶長三年（一五九八）に秀吉は亡くなります。そういった時代に闇齋先生の祖父は動きました。

はじめに祖父と父について記します。前述の『山崎家譜』に、闇齋先生の祖父浄泉（一五五七〜一六二四）は二十四歳のとき、木下家定（一五四三〜一六〇八）の家来になったとあります。祖父は、武への志が高く、「正直」なひとであったと語り伝えられています③。その時から約四十年、山崎家は木下家を支えました。家定は寧々の兄にあたり、若い頃から秀吉の家来になっていました。浄泉は家定からの信頼は厚く、慶長十一年（一六〇六）には又左衛門という名前をもらっています。浄泉の長男浄因が闇齋先生の父にあたり、天正十五年（一五八七）泉州岸和田に生まれています。文禄四年（一五九五）には姫路で父の弟が誕生し、末弟は慶長四年撰津国大坂で生まれました。一家は岸和田、姫路、大坂と転々としていたようです。しかし祖父自身は家定の命に従い、各地を転戦する毎日だったのでしょうか。同十三年家定の没後は浪人となって京都で暮らし、六八歳で没しています。

浄因は十一歳より家定に仕え④、十九歳で清三郎の名を、家定没した後は、次男の木下利房に仕え、清兵衛の名をもらいました。しかしなぜか十年後の元和四年（一六一八）に致仕（家来をやめること）。寛永七年（一六三〇）にまた利房の家来に復帰。そして四年後に再び浪人になりますが、理由については分かっていません。父浄因もまた、その父に似て、万事に控えめで正直な人であったと伝えられています⑤。延宝二年（一六七四）に八八歳で亡くなりました

た。

次に木下家の人たちについて記します。家定は文禄四年（一五九五）姫路城二万五千石の城主になりました。秀吉から深く信頼されていたのです⑤。慶長五年（一六〇〇）関ヶ原の戦いときは北政所を守り、動きませんでした。徳川家康からその功を認められ、姫路城から備中足守二万五千石に移封となりました。ただ足守には行かず、京都の寧々の近くにいたようです。浄因もまた同じように京都にいたであろうと思われます。

勝俊（一五六九〜一六四九）⑤は家定の長男ですが、天正十五年から竜野城主として山崎とも関わっており、山崎村への「新町申付書」⑥はその時に下したものです。文禄三年からは若狭国小浜六万二千石の城主になりました。しかし、関ヶ原のときに、家康から伏見城留守居を命ぜられながら城を抜け出したことで、怒りを買って領地を没収される。その後の勝俊は浪人として京都東山（のち西山）で長嘯子（ちょうしょうし）と号し、優れた和歌を残しました。

利房（一五七三〜一六三七）⑤は家定の次男です。利房は若狭国高浜二万石の城主でした。関ヶ原では西軍に属して、領地没収となりましたが、彼もまた寧々の存在で死を免れることができました⑦。慶長十三年に、家定の遺領を勝俊・利房の二人に継がせよとの家康の命に反して、寧々が勝俊一人に与えていたことから領地を一時没収されます。その時には浄因も利房の家来として苦勞があったでしょう。その後の大坂の陣では利房は東軍として働きました。元和元年（一六一五）、この功により備中足守二万五千石の再興を許されました。利房を支えてきた家来として浄因の苦勞も実り喜んだこと

と思います。足守藩は幕末まで続きます。ただ利房は一度の領地視察だけで足守に入らず、浄因も同じく京都にいたのでしょうか。

三男延俊（一五七四〜一六四二）⑧は、関ヶ原後は豊後速水郡日出（ひじ）に三万石を与えられ日出藩も幕末まで続きます。五男の秀秋（一五八二〜一六〇二）⑧は小早川家の養子に出されます。関ヶ原で東軍につき備前美作五十一万石の城主になりましたが二十一歳で亡くなります。

闇齋先生が七歳の時に祖父が亡くなっています。また、父は闇齋先生が生まれたときに、浪人になり鍼医者をしてしながら生計をたてたという話が残されています。闇齋先生は、厳しい戦国時代を乗り切った祖父と父から厳格さと正直さと世の中の変遷を見極める目を学んだのかもしれない。

参考文献

- ①高井 淳 「山崎闇齋先生祖考の碑と私」 『山崎闇齋先生生誕400年記念誌』 十一頁 山崎闇齋研究会編集 二〇一九年
- ②山崎闇齋 『山崎家譜』 下御霊神社発行 一九二六年
- ③澤井啓一 『山崎闇齋』 ミネルバ書房 二〇一四年
- ④牛尾弘孝 『山崎闇齋』 山崎町教育委員会発行 二〇〇五年
- ⑤『吉備郡史巻中』 二四五三〜二四五八頁 岡山県吉備郡教育会 一九三七年
- ⑥『新町申付書』 山崎八幡神社蔵 天正十七年に勝俊が山崎村に下した申付書で山崎村に新町を作るので、誰でも望み次第に移り住むことができるというもの
- ⑦杉原康子 「われ、関ヶ原に出兵せず」 『播磨城主たちの事件簿』 四六頁 編者播磨学研究所 二〇一三年
- ⑧『備中足守藩関係年譜』 『岡山に生きた豊臣家』 一一二〜一一四頁 岡山シティミュージアム編集・発行 二〇一五年

上比地岩田神社と 『播磨国風土記』比治里再考察

片山 昭悟

一、はじめに

播磨国宍粟郡比治里に比定される上比地の岩田神社の現地調査を行ったので、その概要を今回紹介させていただきます。

これまで『山崎郷土会報』には、

第九十六号に「上比地岩田神社の神宝について」二〇〇〇・九

第一三〇号に「播磨国宍粟郡比治里一考察」二〇一八・二一

第一三二号に「上比地の岩田神社の當屋について」二〇一九・二の拙稿を紹介している。

なお、「播磨国宍粟郡比治里一考察」に庭音村についての論考を紹介している。

今回は上比地の岩田神社と『播磨国風土記』比治里について再考察を試みました。

二、上比地の岩田神社の位置について

なぜ上比地字森の上の段丘上に岩田神社(写真1)が、この位置に鎮座しているかと思つたからで、これまで幾度か現地調査と写真撮影をしているが、南に位置する向山(むかいやま)(写真3)が神の宿る山で神奈備山ではないかと私は考えている。

正面には富士山のような山(写真2)が見える。この山並みも岩

田神社の位置的に極めて重要な山の一つであると私は思う。

上比地の岩田神社は、上比地と中比地と金谷が氏子で、岩田神社の祭祀については、これまで五十波の大部正勝氏が宮司をされていましたが、今は御形神社の宮司進藤千秋氏がされている。

三、岩田神社の地理的・歴史的背景

私は日頃考えていることを城下地区の話題として紹介する。

岩田神社は、『播磨国風土記』宍粟郡比治里の中心の位置と考えている。

周辺の地形を見てみると、岩田神社の東南方向の正面には、高圧電線の鉄塔と鉄塔の間のところの山がちょうど富士山のような山にも見える。本殿の背後背景には、金谷の国見山と向山(むかいやま)(写真5)が位置している。

東は城下平野が一望できます。川戸の山や高所の山(写真4)や神谷の八岡山や三谷の山がよく見える。

岩田神社については、江戸時代の元禄十六年(一七〇三)に再建されている。榎(かや)の一本堂として知られている。榎は、杉に似て文彩があり、地元の伝承によると、岩田氏が寄進したとされる。火事で焼失している。再建時にも再利用されている。

上比地の宮総代であった故藤川勉氏にご教示いただき、岩田神社のご神鏡の調査をさせていただいた。江戸時代後期の柄鏡二面、西村因幡守と天下一藤原義信とされる。一七〇〇年代にあたり、岩田神社の再建時に奉納されたのであろうと思われる。

正徳二年(一七一六)の鳥居があつたが、事故があつて今は年代

が確認できるだけである。

ちなみに関連することから、江戸時代に鹿沢の台地に城が築かれたのは、片岡醇徳の『宍粟郡誌』宝永五年（一七〇八）によると、中国神仙思想が影響していて、四神を考えたことが書いてある。

「山崎町北は篠の丸（玄武）、東は出石川（青龍）南は沃野（朱雀）西は因州（因幡）、作州（美作）への経路（白虎）是四徳相応の地に似たりと云う。」

私は岩田神社から現地をみて、南の向山や富士の山に似た山並みとされるところは朱雀で川戸山並みと揖保川が大きく蛇行する青龍で、金谷の亀ヶ尾が玄武で、国見山から向山と西の山が白虎ではないかと考える。岩田神社も神仙思想が影響して四神に関連するのではないか。

それから安田青風先生が城下小学校の校歌を昭和二十八年（一九五三）五月に作詞されているが、一番には「青垣山にかこまれた広い平野は土肥えて清く明るい揖保川の水は流れるとこしえに」とある。この歌からも城下の風景に関連することが紹介されている。

岩田神社について第一三二号の「上比地の岩田神社の當屋について」の中に、『兵庫縣神社誌』の岩田神社について紹介させていたのだいた。

『兵庫縣神社誌』によると、

村社岩田神社は、鎮座地は、城下村上比地字森ノ上である。

祭神は磐筒之男神、磐筒之女神、磐別神、經津主神、瀬織姫命由緒は、創立の年月は不詳ですが、元禄十六年（一七〇三）に本殿を造立し、寛延元年（一七四七）同殿の屋根替を行っている。明

治六年（一八七三）十一月村社に列し、同四十二年（一九〇九）には比地の瀧神社を合祀している。

本殿造立の棟札は、元禄十六年（一七〇三）奉造立岩田大明神ノ社は、播州比地ノ郷比地村鎮座本多肥後守様御代に御材木白金御寄進とある。

元禄十六年（一七〇三）癸未九月十三日。外略

本殿屋根替棟札。寛延元年（一七四七）

やね替の神主は、清左衛門

寛延元年（一七四七）辰ノ八月。外略

正徳二年（一七一六）の鳥居があったが、今は年号が確認できるのみ。境内には大年神社（大歳神）がある。

四、上比地岩田神社周辺の歴史的背景

上比地森の上の台地上に岩田神社が位置している。

町道と県道の拡幅工事に伴う埋蔵文化財調査で家原遺跡に匹敵する弥生時代から古墳時代、奈良時代の大規模な遺跡であることが確認された。

奈良時代には、『播磨国風土記』宍粟郡の比治里で里長は山部比治で、平安時代の『和名類聚抄』には、比地郷とされる。

平安時代末には比地荘、室町時代の『看聞御記』によると、嘉吉三年（一四四三）伏見宮家領の荘園であったとされる。

比地御祈の代官に小河源左衛門が任ぜられている。文安三年（一四四六）の伏見宮貞成讓状案には、「播磨国衙比地御祈」が記載されている。

五、「播磨国風土記」比治里再考

次に播磨国宍禾郡（しさわのこおり）の比治里について紹介する。

『播磨国風土記』宍禾郡比治里条によると、

比治里。土中上。所_三以名_二比治_一者、難波長柄豊前天皇之世、分_二揖保郡_一作_二宍禾郡_一之時、山部比治、任為_二里長_一。依_二此人名_一、故曰_二比治里_一。

比治の里。「土は中の上」比治と名づけるわけは、難波の長柄の豊前の（宮で天下をお治めになった孝徳）天皇のみ世、揖保郡を分けて宍粟郡を作った時に、山部の比治が任命されて里長となった。この人の名によったために、比治の里という。

比治の里の範囲は、山崎町南部の城下地区で、中国縦貫自動車道より南にあたる。

難波長柄豊前の天皇の孝徳天皇は、大化元年（六四五）から白雉五年（六五四）まで在位されている。大阪市の難波宮前期に住んだとされます。山部比治は七世紀中頃に宍禾郡が成立したときに比治里の里長となっている。

『播磨国風土記』比治里によると、宍禾郡（しさわのこおり）は孝徳天皇の時に揖保郡から分かれ、比治里（ひぢのさと）は、里長の山部比治から名付けられたとされる。比治里には、宇波良（うはら）村、比良美（ひらみ）村、川音（かわと）村、庭音（にわと）村、奪谷（うばいだに）などの地名が記されている。

宍禾郡は、比治里はじめ、高家里（たかやのさと）、柏野里など

伊和大神と天日槍の伝承が記載されている。

庭音の村については、川音村の次に記載されている。

庭音の村。もとの名は庭酒であった。大神の御食糧が、濡れてかびが生えた。そこで酒を醸させて、それを庭酒として神に献つて宴会をした。だから、庭酒の村という。今の人は庭音の村という。

奪谷についても、庭音の村に記載されている。奪谷。葦原志許乎の命と天の日槍の命と二柱の神が、この谷を奪いあいなさった。だから、奪谷という。その奪いあったことよって、谷の形が、曲った葛のようである。

『播磨国風土記』の宍禾郡については、平成二年（一九九〇）頃に植垣節也先生や建部恵潤先生よりご指導をいただいて現地調査をしてきたが、比治里についても地元の金谷であり関連する地でもあり、興味をもっていた。

比治里の範囲については、上比地、中比地、下比地から金谷、宇原、川戸、平見、城下地区一带と考えるのが穏当である。

六、庭音村の再考

比治里の庭音村と奪谷についてはどこか不明であるが、庭音村については、比治里であることには間違いない。

一宮町能倉の庭田神社は、「延喜式」の式内社であり、平安時代にはお宮が存在していた。ここには「ぬくい川」という川が神社付近を流れ、御神酒の伝承の地であることから日本酒の発祥の地とされている。

私は『播磨国風土記』の宍禾郡比治里にある庭音村は、比治里が

当時一宮町まで飛び地であるとは考えられないと思っている。

比治里内であり、川音村の次に庭音村は記載されていることからみても城下地区のどこかにかつて存在していたもの考えられる。庭音村は、城下の岩田神社から式内社の雨祈神社周辺ではないかと考えている。

庭音村について文献から推察してみると、(以下抜粋)

秋本吉郎校注『風土記』によると、(p318~319)校

注八 遺称なく所在地不明。式内社庭田神社を遺称とし、その社地(一宮町上野田の能倉)に擬する説(敷注・新考)があるが、地理があわない。とされている。

井上通泰『播磨國風土記新考』によると、(p356)

『宍粟郡誌』に式内社庭田神社 染河内村能倉にあり。古傳に大名持大神天下を作り訖へ給える時其の大擧(だいきよ)に擧れる諸神を招集へて酒を醸し山河の清庭の地を擇て慰勞(いろいろ)のため饗應し給へし靈蹟なるにより社殿を造勞し奉りて其の御魂を鎮め祭れりといふ。とありてここに云へると事稍相似たれば庭田は庭音の訛(なまり)とすべし。更に案ずるに染河内村と戸原村との間には神戸・神野・河東の三村(本書の名稱にていえば伊和・安師の二里)あれば庭田を庭音の訛て庭音を今の染河内村能倉とせむに地理かなはず。と紹介とされている。

七、奪谷と稻春の岑の再考

次に奪谷(うばいだに)について紹介すると、(以下抜粋)

井上通泰『播磨國風土記新考』によると、奪谷(p318、319)校注一二 遺称なく所在地不明。新考は前条庭音村と同地(一宮町内)に擬し、御方里の記事の錯簡(さつかん)とするが従い難い。とされています。

奪谷については、葦原の志許乎の命と天の日槍の命と二柱の神が、この谷を奪いあつたことから奪谷という。奪いあつたことよつて谷の形が曲つた葛のようであるとされるとされる。現在どこかは不明であるが、比地保キから城下をみると、川戸山の峰があり、谷の形が曲つた葛のようであると考えることも一つであると思うが、奪谷は庭音村であることから城下の岩田神社周辺から見渡すと、一つは国見の森から金谷字石ヶ谷かあるいは、須賀沢の谷を奪谷ではないかとも考えられる。

稻春の岑(いねつきのみね)については、国見山から南面する観音山か、あるいは揖保川の西に位置する野の稻垣神社からみて川戸山から東方の岑ではないかと私は思っている。

庭音村と稻春の岑と奪谷については、いずれも比治里内のどこかであり、会員の皆様によつて今後の調査と研究で解明できるものと考えている。

参考文献

片岡醇徳『宍粟郡誌』宝永五年(一七〇八)

井上通泰『播磨國風土記新考』大岡山書店 昭和六年(一九三二)

復刻版臨川書店 昭和六十一年(一九八六)

秋本吉郎校注『風土記』日本文學大系2岩波書店昭和三十三年

(一九五八)

植垣節也校注・訳者『風土記』新編日本古典文学全集小学館

一九九七

「播磨国風土記」参考文献(年代ごと)

元禄十六年(一七〇三) 加賀前田家

三条西家本『播磨風土記』を発見、修復する。

寛政八年六月(一七九六) 柳原紀光 柳原本 岩瀬文庫

安政元年(一八五四) 敷田年治『標注播磨風土記』

安政四年十月岡平保 岡平保本 岡家

文久元年(一八六一) 三月藤原晋いまほり本 個人蔵

文久八年(一八六三) 八月樽井守城関大本 関西大学図書館

明治十九年(一八八六) 土居精一郎

明治二十年(一八八七) 敷田年治『標注播磨風土記』玄同社

明治三十二年(一八九九) 栗田寛『標注風土記』

明治三十五年(一九〇二) 一月二十九日松岡調(伊和神社)

大正十五年(一九二六) 三条西家本『播磨風土記』古典保存会

昭和二年(一九二七) 松岡静雄『播磨風土記物語』刀江書院

昭和六年(一九三一) 井上通泰『播磨風土記新考』大岡山書店

昭和八年(一九三三) 藤本正治『播磨風土記私考』伝説研究会

上比地岩田神社と『播磨国風土記』比治里 位置図

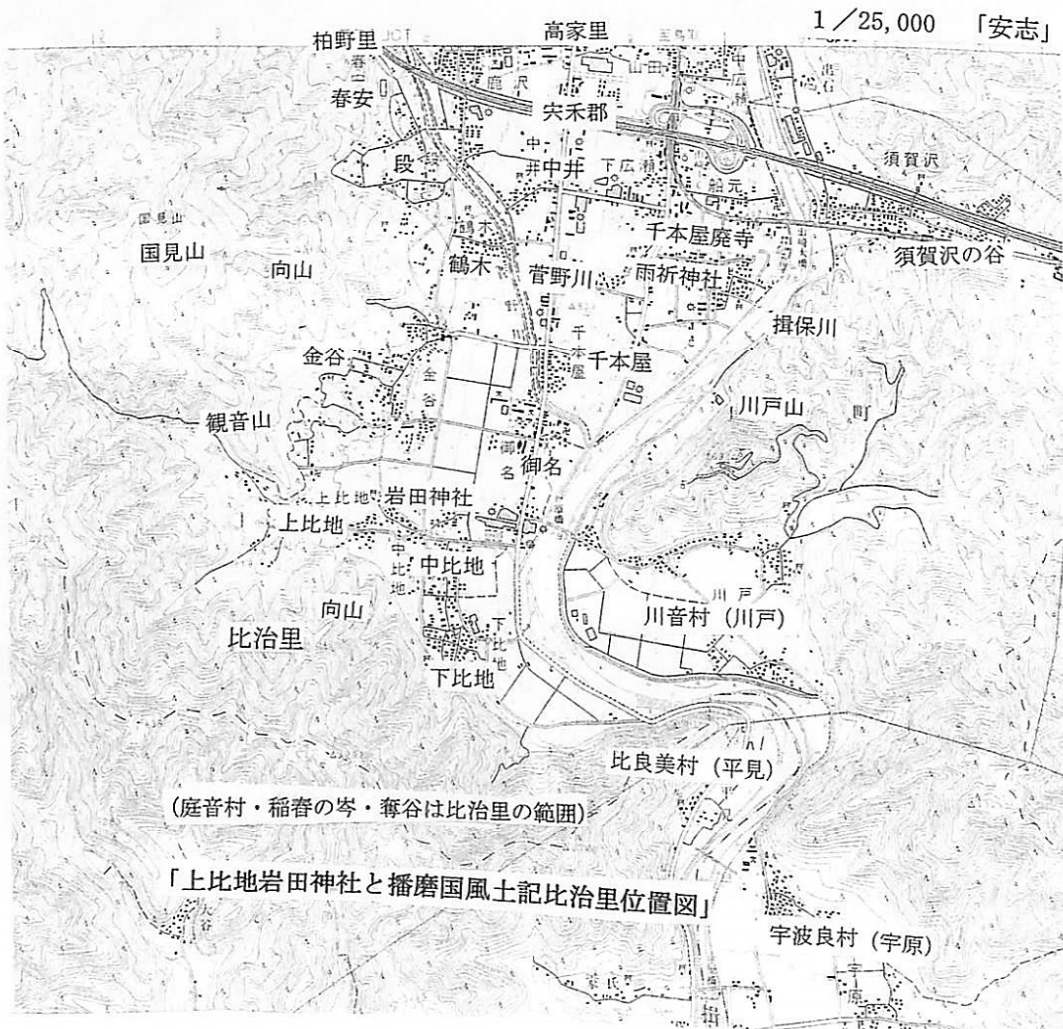




写真1 岩田神社



写真2 岩田神社の正面に見える山



写真3 岩田神社の南面に見える向山

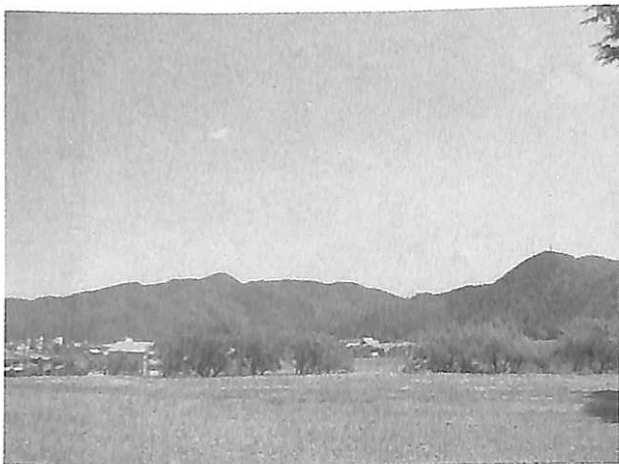


写真4 岩田神社から東を見た城下平野と川戸山と高所山



写真5 岩田神社の背景に見える国見山と向山

史跡案内石柱の補修

史跡部

会員に皆様でご存じでない方もいらっしゃるかも知れませんので、町内の史跡の現地に史跡案内の石柱を建立していることを改めてご案内します。この石柱は昭和五十一年から町内のあちこちの歴史的意義のある史跡を次世代に残そうと、平成十三年まで二五年間に亘って、合計四十四基設置しています。

その中で次の三基が傾いたり、グラついていて補修しなければならない状況になっていました。現在の本会の予算ではどうすることもできず、宍粟市に修理・補修についてお願いをしましたところ、聞き入れていただき次の三基とも補修が完了しましたのでご報告いたします。

一、桜の馬場跡……………山崎西中学校グラウンド隅にありましたが、不安定になっていたので少し場所を移動して設置済。

二、清水口見付御門跡…山田の市道脇にあり、傾いていたのを同場所へ設置し直しました。

三、中御門の跡……………本町の市道脇で通学路の際に傾いて立っていません。私有地で相生市の(株)石原商店様の所有地でした。安全面を考慮して設置場所を少し移動して設置することにご同意いただき、同社と設置の覚書を締結しました。

このように、長い年月の間に設置場所の形状が変わったり、設置条件が変わったりしますので、お気づきの点は史跡部又は会長へご一報くださいますようお願いいたします。



桜の馬場跡



中御門の跡



清水口見付御門跡

会員・家族の文芸

◎俳句

氷河期の褶曲名残大夏野
泉州茄子まるまると手の重さかな
藪椿同姓多し鄙の里
青嵐すくむ思ひの行者道
同胞のすこやかねがふ天の河
祖父に似て末広がりの素足かな
誰が吹く草笛ふるさと恋うるかに
総出して里は賑しや溝浚へ
半分を閉めて八百屋の春灯し
手移しに光る螢や指透ける
子の家を避寒の宿と訪ねけり
菅公の風の耳打ち若葉道
無住寺を守る男や濃紫陽花
山寺の御仏古ぶほととぎす
露の葉にかすかな音や夜半の雨
牡丹はや散らしておりぬ夜の雨
洗い髪手櫛で通す夕の風
国境もいさかひも無し燕来る
夏空に直線描くゴルフ球
終戦日地球の戦火収まらず

京屋 伊助
京屋 伊助
京屋 伊助
杉山美保子
杉山美保子
高井 麗子
高井 麗子
田中 良子
田中 良子
田中 良子
鳥羽チエノ
鳥羽チエノ
三浦 ゆき
三浦 ゆき
里見 和樽
里見 和樽
高井 智代
高井 智代
速水美知代
速水美知代
宗平 圭司
宗平 圭司
宗平 圭司

◎冠句 (つた・いさわ・加生・山崎冠句会)

なたね梅雨 時持て余すテレビ前
ひなあられ 雛の顔にも笑みこぼれ
なたね梅雨 花粉押さえて気持よく
ひなあられ 一つ一つと小さな手
なたね梅雨 三寒四温交えつつ
ひなあられ お内裏様は凜として
なたね梅雨 虫対策の時来たる
ひなあられ 母の手作り祖母が炒る
なたね梅雨 菜の花咲いて春を呼ぶ
ひなあられ 床を飾るは桃一輪
なたね梅雨 還暦迎えて気も新た
ひなあられ コロンと転んだ緋毛氈
なたね梅雨 瓦を叩く音しきり
ひなあられ 昭和の節句想い出す
なたね梅雨 まだまだ冷たい雨が降る
ひなあられ 節句に顔だす素朴な味
なたね梅雨 春の香りがどこからか
ひなあられ 皆んなで祝う初節句
なたね梅雨 寒さ感じて上着着る
ひなあられ 子供の健康祈願する
ひなあられ 畑に沁み込み土肥やせ
ひなあられ 高坏の朱が色を添え
なたね梅雨 二日続けば空ばかり
ひなあられ 母の笑顔を思い出し

宇田 幸夫
宇田 幸夫
坂本 忠彦
坂本 忠彦
実友 勉
実友 勉
嶋津 千里
嶋津 千里
為国真佐行
為国真佐行
谷笹 まや
谷笹 まや
高井 玲依
高井 玲依
西家 侑希
西家 侑希
三木ひづる
三木ひづる
飯塚 正浩
飯塚 正浩
飯塚 正浩
大谷 志路
大谷 志路
中瀬 公三
中瀬 公三
中瀬 公三

*次号に掲載する文芸作品の投稿をお待ちしています
併せて新会員を募集しています

事務局だより

編集後記

令和四年度の通常総会について

記

日時 令和四年四月十七日(日) 午後二時より

場所 宍粟防災センター四階研修室

議事 一、令和三年度事業報告について

二、令和三年度会計報告について

令和三年度監査報告

三、令和四年度事業計画について

四、令和四年度会計予算について

総会終了後、記念講座として、「播磨国風土記」を鑑賞しました。

令和四年度の研修旅行中止のお知らせ

毎年実施していましたが研修旅行は、新型コロナウイルスが未だに終息していませんので、令和三年度に続いて、やむをえず中止にしました。

『山崎郷土会報 第一三九号』をお届けします。

新型コロナウイルスは、未だに終息してなく拡大する状況です。

第一三九号ができるかどうか心配していましたが、皆様のご協力によりいずれも力作が集まりました。

大谷司郎会長は、安田青風と山崎(二)について、前号に続く大作です。竹内克司さんは、ぶらりふるさと地名考の「蔦沢」について、高井淳さんは、闇齋先生の祖父と父、そして主家木下家について紹介されています。それから清水哲さんは、与位・田井間の山越えについて現地で地元の方からお聞きして説明されました。

私は上比地岩田神社と播磨国風土記比治里について現地を訪れて紹介しています。それから史跡部の史跡案内石柱の補修について、会員家族の文芸など会員の皆様にとって有益な内容で、これからも山崎郷土会報は皆様の声を届けるようにしたいと思います。

(片山昭悟)

追記

それから悲しいお知らせです。

前会長で顧問であった五十波の春名俊夫さんがお亡くなりになりました。謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

山崎の歴史に大変詳しく、「山崎郷土会報」にも多く投稿されています。とくに五十波構について書いておられたのは、今も語り継がれる力作であろうと思います。やまさき文化大学の歴史探訪の講師をされて、宍粟市のことや兵庫県内のことを話しされておられたことは、深く印象に残っています。

- 相続手続時、名義変更に関するアドバイス
- 各種税務手続き
相続税・贈与税確定申告手続 電子申告環境サポート
所得税確定申告
- 経理自計化のお手伝い
- 法人税・地方税・申告書作成代行
- 経営助言

〒671-2533 兵庫県宍粟市山崎町須賀澤1329-7
高橋利典税理士事務所
 税理士・行政書士 高橋 利典
 TEL (0790) 63-2150/FAX (0790) 63-0445



パンフレット・デザイン広告
 名刺・封筒・伝票・新聞広報誌
 ポスター・案内状・シール等

(有) 稲田印刷

〒671-2577 兵庫県宍粟市山崎町山崎454
 TEL (0790) 62-0254 FAX (0790) 62-4764

外科・内科

山中医院

院長 山中潤一

山崎町西町・TEL 0036

ほっと、ひといき

伊沢の里

- 各種宴会 祝い、法要、同窓会(送迎バス有り)
- 宿泊 観光、ビジネス 帰省
- 日帰り入浴 乾風呂、露天風呂、サウナ
- レストラン 御膳、定食、麺類、丼物

兵庫県宍粟市山崎町生谷214-1
 TEL.0790-63-1380 FAX.0790-63-0362
 URL:www.isawanosato.com E-mail:info@isawanosato.com

PHOTO-STUDIO
Meyama
 P.C.S

スタジオウエヤマ

- 山崎店 兵庫県宍粟市山崎町山田204
 TEL (0790) 62-8027
 FAX (0790) 62-8827

株式会社 安井書店

兵庫県宍粟市山崎町山崎90 〒671-2577
 TEL (0790) 62-0700(代) FAX (0790) 62-0700

E-mail:gaisyo@yasuisyoten.co.jp
 URL:http://www.yasuisyoten.co.jp/

老松酒造有限公司

- 老松ダイニング
発酵と麹の健康ランチ
定休日:木曜日(予約優先)
- 老松販売所
日本酒・リキュール・麹商品



老松酒蔵見学出来ます

〒671-2577
 宍粟市山崎町山崎12
 電話0790-62-2345



まごころを伝えます。

一献献上 品質本位 地酒



確かな品質と味わい。



SANYOHAI
 山陽盃酒造株式会社
 兵庫県宍粟市山崎町山崎28

TEL.0790(62)1010 FAX0790(62)6218
 E-mail info@sanyouhai.com HP http://www.sanyouhai.com